

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 10 月 26 日現在

機関番号：16301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370022

研究課題名(和文) 現代の危機の転換へ向けた「労働」を巡るハイデガーの思惟の究明

研究課題名(英文) The Elucidation of Heidegger's Thought about the "Labor" for Turning the Crisis of Modern Times

研究代表者

山本 與志隆 (Yamamoto, Yoshitaka)

愛媛大学・法文学部・教授

研究者番号：50294781

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：ハイデガーとユンガーに焦点を当て、現代社会に蔓延するニヒリズムの中での我々人間存在の在り方を解明した。

具体的には、ニヒリズムの中では人間存在が「労働者(Arbeiter)」としてのみ把握されることを手引きとして、現代は人間存在がそれ自身に固有の意味や価値を剥奪されて、ただただ外的な目的に資するという尺度でのみ規定される時代であることが剔抉された。また、そうした経緯の中で「労働」のあり方そのものが変質を被って、人間存在そのものの意義を無化(Vernichtung)するあり方を呈するようになったことに対して、「労働」の現代的あり方を本来的なあり方へと転換するための視座を提示した。

研究成果の概要(英文)：Focusing on the thoughts of Heidegger and Juenger, this research has elucidated the nature of the existence of human being in the nihilism, which is prevalent in modern society.

Specifically, with the consideration of the fact that human being is grasped only as "the laborer (der Arbeiter)" in nihilism, it is clarified that our time is the time that human beings are deprived of their own significances and values inherent in itself, and estimated with the scale concerning whether it can contribute for the other purposes or not. In addition, to the fact of today that while being altered the way of "labor" itself in such circumstances, the signification of human being itself has begun to come to nothing (Vernichtung), this research has presented the perspectives for converting the contemporary way of "labor" to the authentic one.

研究分野：現代ドイツ哲学

キーワード：ハイデガー ユンガー ニヒリズム 労働 総かり立て体制 総動員 科学技術文明 危機の転換

1. 研究開始当初の背景

近年ハイデガーの思惟と政治あるいは社会的状況との関わりが再び問い直されつつある。それも、ハイデガーのナチへの政治的加担を史的な事実に基づいて検証しようという約 20 年前の論争の方向のみにおいてではなく、**ハイデガーの思惟が根本においてもっていた内的可能性を政治的、社会的観点において展開しようという方向においてである。**このことは、現在日本で最も活発なハイデガー研究の場である「ハイデガー・フォーラム」の 2013 年度第 8 回大会の統一テーマが「時代の根本気分」とされ、現代の共同体における根本気分とその政治的可能性を問い直そうとすることに明確に示されている。また海外でも、早くは A.ゲートマン＝ジーフェルト/O.ペグラー編『ハイデガーと実践哲学』(1988)を初め、P.ブルデュエや Ph.ラク＝ラバルト等がハイデガーの思惟と政治との関わりを批判的に考察している。日本においても小野紀明『政治哲学の起源 - ハイデガー研究の視角から』(2002)や『ハイデガーの政治哲学』(2010)、轟孝夫『存在と共同 - ハイデガー哲学の構造と展開』(2007)等が、それぞれの立場でこの主題についての考察を進めている。

そのような中で、申請者は日本語版『ハイデッガー全集』の第 90 巻『エルンスト・ユンガーへ』の翻訳を引き受けることとなり、ハイデガーとユンガーの思惟を突き合わせて考察する機会を得た。そして 1930 年代以降のハイデガーの思惟の「転回」の中でなされたユンガーとの対話の内に、まさに現代の危機的状況を導いてきた根本問題を巡る省察を見出した。

現代に生きる我々がハイデガーの思惟を振り返る理由は、**ハイデガーが『存在と時間』の時期の思惟から、「転回」を経て後期の思惟へと移行しようとしていた当時の時代状況と現代との共通点にある。**二つの世界大戦の間にあった 1930 年代は、フッサールやハイデガーといった当時の思想家たちによって「危機の時代」と認識されていた。翻って、現代の我々の生きる社会的・経済的な時代状況は、当時に劣らぬ危機的状況にあるといえる。政治の面での民族的対立、経済的対立に加えて、地球環境が産業の視点から「資源倉庫」と見なされて収奪の対象とされることで、多様な環境問題を生み出すと共に、自然災害に直面している。また大衆社会化の過程で人間存在も「人的資源」「人材」と見なされ、その中で我が国では貧困や社会的格差を原因とする自殺者数の増大等といった問題を生じている。**これら諸問題の根底には人間存在にとっての「労働」の意味の問題が存在している。**そして、この度の東日本大震災である。ここでは、上記の問題の多くが集約的に顕在化していると考えられる。

これら諸問題を導いているのは、ある主導

的な価値観に従って一方向に全ての人と物とが「総動員」される、という根本動向であると考えられる。実際、上述の思想家たちは、当時の危機を、ヨーロッパ的な思惟の伝統を主導してきた形而上学、さらに近代以降の科学技術的思惟の根底にある「ニヒリズム」の帰結と見ていた。そうした「ニヒリズム」のあり方は、現代において度を増しこそすれ、衰えることがない。したがって、現代の我々は自らの直面する危機を転換するために、**1930 年代当時の危機を巡る思想、とりわけ「労働」を巡る思惟のあり方を再検討する必要に迫られていると言っても過言ではないであろう。**

2. 研究の目的

本研究において注目するのは『存在と時間』以降「転回」を遂げるハイデガーの思惟であり、ニヒリズムの到来を予感していたニーチェとの対決の中で、ハイデガーが取り上げたユンガーの「労働」についての思惟である。というのは、「**貧困**」あるいは「**被災**」をキーワードとする現代の多様な危機の中に、**幾重にも重ねられた「労働」という概念の変容、変質が見届けられると考えられる**からである。そこで以下の 3 点が本研究の目標となる。

1) 「労働」の変容、変質のあり方の究明

まずユンガーに対するハイデガーの思惟の対決を跡づけ、「**労働**」が人間存在に対して有する根源的な意義を確認する。しかし、この「労働」という概念は単にある時代のある地域における人間的な活動の一つを名指すだけのものではない。ハイデガーは、ユンガーの「労働」あるいは「労働者」の概念の内に、ニーチェが批判したヨーロッパの形而上学の歴史の根源を見て取っている。つまり、ユンガーの見た「労働者」のあり方が、古代ギリシア以来の形而上学の歴史の終局の帰結として理解されているのである。そこで、第二の目標は次のものとなる。

2) ユンガーの思惟における「労働」、「労働者」の概念の究明と、形而上学あるいはニヒリズムの歴史に対するハイデガーの布置の究明

まず、ユンガーの「労働」、「労働者」概念の批判的な検証が求められる。そしてこれは同時に、ハイデガーの見るヨーロッパの形而上学の歴史の帰結を検証することにほかならない。したがって我々はこのような検証を通じて、しばしば「秘教的」と評されるほど難解とされ、把握する価値がないとまで批判される、**ハイデガー自身の望見していた「別なる始まり」の思惟のあり方を逆照射することができるはずである。**これを踏まえて、次の最終目標となる。

3) 「労働」、「労働者」概念の捉え直しによ

る、我々の危機の時代の「転換」への示唆の獲得

ニーチェが『力への意志』の中でなした「ニヒリズムの到来」という同時代診断は正鵠を射ていた。ユンガーはこの診断を承けて、その具体的問題の所在を「労働者」のあり方に見出す。形而上学の帰結としてのニヒリズムによって「労働」が世界と自己を「動員(Mobilisierung)」することへと変容され、自然も人間存在も消費財と見なされるようになるのに対して、ユンガーは力への意志の実践的形態として、労働者のあり方を捉え直そうとしていた。しかし、ハイデガーはそのようなユンガーの内にこそ、形而上学の終局形態を見出していた。つまり、ユンガーが形而上学の本質であるニヒリズムによって規定される領域の「線を越えて」ニヒリズムの超克を目指す領域に立とうとするときにも、ユンガー自身が語る言葉は、形而上学の言葉に留まっていたがゆえに、ニヒリズムの極北に立つことになる、とハイデガーは言うのである。これはまさにハイデガーがニーチェの思惟に見出した事柄であり、ここからハイデガー自身が形而上学の超克を企図した「別なる始まり」の思惟につながる事態に他ならない。ということは、このような歩みを辿るハイデガーの思惟を理解し、そこから社会的・政治的な意義を読み取るためにも、我々はハイデガーの関心の向かうところである、ユンガーの思惟のあり方を省みること、我々の「労働」、「労働者」概念を捉え直す必要がある。そしてこのことを通して、**現代の我々の危機を超克するための導きの糸を獲得する手掛かりを、労働の思想の分析、解釈を通じて築くことが、本研究に求められる最終的な課題である。**

3. 研究の方法

上記の目的のために、以下の3つの課題を設定する。

1) 第一に**ハイデガーが伝統的な西洋の形而上学の根源にあるニヒリズムを批判する際の論点を確定する必要がある。**そのためには、公刊中のハイデガー全集等の基礎資料を初め、二次文献の綿密な分析、解釈を遂行する。それと同時に、ドイツの現象学、ハイデガーの哲学の研究拠点であるヴッパータール大学、フライブルク大学と連携することや、メスキルヒのハイデガー・アルヒーフで資料調査することが研究遂行のために極めて重要な意義を有する。特に、ハイデガー全集の編集を担当する P. トラヴニー教授、ドイツのハイデガー協会の会長を務める G. フィガール教授とハイデガーの思惟の展開について、フライブルク大学のフッサール・アルヒーフ所長の H-H. ガンダー教授とフッサールの「危機」の理解について、国際学会やシンポジウムに積極的に参加することで、意見を交換する機会をもつことが有益且つ必要である。

2) 次に、**上述の現象学や解釈学、特にハイデガーの思惟が人間存在と、その活動としての「労働」をどのように位置づけることによるかを検討する必要がある。**そのために、ハイデガーの「労働」についての思惟の参照軸として、上述のユンガーの『労働者』、『大理石の断崖の上で』、『総動員』、『線を越えて』等や、また『人間の条件』を著したハンナ・アレントの思惟を併せて検討する必要がある。その際、「ニヒリズム」を如何に解釈するかが鍵となることから、当然ニーチェの思惟を十分に視野に入れる必要がある。このようにして、ハイデガーの思惟と、ニーチェ、ユンガーあるいはアレントの思惟の連関を明らかにすることは本研究において重要な課題である。

3) さらに、形而上学の根源にあるニヒリズムの自然や人間存在に対する布置を把握することから、とりわけこの度の東日本大震災以後の、迷走する人間と世界、あるいは自然との関わり、さらにその中での技術と「労働」のあり方について、**環境倫理や生命倫理に関わる問題をも含めた、現代の社会的な危機に対して、ハイデガーの言う「別なる始まり」の思惟が果たしうる役割を考究することが最終的な課題となる。**

本研究全体の目的達成のために、日本の「ハイデガー・フォーラム」の研究者と学術的交流を図るとともに、ニーチェ研究、ハイデガー研究で独自の知見を有される圓増治之愛媛大学名誉教授、壽卓三愛媛大学教授と研究会を通して連携を深めていく。その中で、ハイデガーが西洋の伝統的な形而上学、ニヒリズムに見出していた問題を見極め、それらを継承しその度を深めていくように見える現代の我々の危機の状況を克服するために、「別なる始まり」の思惟がなし得ることの究明を目指す。

4. 研究成果

本研究課題は、20世紀前半を生きた M. ハイデガーと E. ユンガーという二人の思想家・哲学者に焦点を当てた。そうすることで現代の社会に蔓延していると言っても過言でないニヒリズムのあり方が、いかにして理解されており、その中でも我々人間存在がどういったものとして解釈されているかを解明しようとするものである。そしてそうしたニヒリズムの現況の中で、我々人間存在がどのようなものとして在るのかを解明することが課題となる。そこで鍵となるのは**ユンガーの「労働者(Arbeiter)」としての人間存在の把握の仕方**である。すなわち、従来では人間が存在するために労働がなされていた。あるいは別の言い方をすれば、人間存在が仕事をする、ということが当然のこととして理解さ

れていた。ところが19世紀末から20世紀の初頭以来、我々人間存在が「労働」のために存在するもの、純粋な意味において「労働者」としてしか存在しえなくなったのではないか、ということがユンガーのこの言葉から理解される。この事態を象徴的に示すのは、言うまでもなく、二つの世界大戦である。ここでは人間存在もまた物量戦のなかへと動員されることでその存在を規定されることになる。つまり、人間存在はただ労働をなすもの、「労働者」としてのみ存在せしめられる、ということである。労働者としてのみ存在する、あるいは換言すれば、労働者としてしか存在しえない。人間存在がそれ自身に固有の意味や価値を剥奪されて、ただただ外的な目的に資するという尺度でのみ測られ、規定される時代である。ニヒリズムの時代であると言わずして何と言われようか。

そして、そのような経緯の中で「労働」のあり方そのものが変質を被っていると考えられる。少なくとも19世紀において、マルクスが労働を規定した際には、もちろん資本家によって搾取されるという否定的な面が問題として取り上げられつつも、本来的には人間存在の可能態の実現という積極的な意義を有していたはずであった。それが上述のような過程の中で、人間存在そのものの意義を無化(Vernichtung)しようとするようなあり方を呈するようになってきたのである。そうした「労働」の現代的あり方を解明するとともに、本来的なあり方へと転換することを目指すのが本研究の最終的な課題であった。

差し当たりの課題は、ハイデガーとユンガーの交流を公刊された文献から読み解き、そこから両者のニヒリズムへの関わりを剔抉することである。その際、言うまでもなく重要な参照軸となるのは、F. ニーチェである。したがって本研究課題の間に考究された内容に関して、ハイデガー、ユンガーとさらにニーチェとの関連が全面に出ていることがひとつの特徴となっていると言える。

以下に、冊子体としてまとめられた研究成果報告書の章立てに従って概要を記すこととする。

第1章 ユンガーとニヒリズムの今

ニーチェの思想圏域のなかでニヒリズムをとらえ、ニヒリズムを、「何人もその影響力から逃れることのできない根底的な力」を有する「大きな運命」として理解していたユンガーの「診断」とその「治療」のあり方に対して、ハイデガーは、ニヒリズムの把握において問われているのは、なんらかの存在者ではなく、「無」であり、存在者ならざるもの、存在者を越えたものを問う、いわば、形而上学であらねばならないと規定する。この観点から、ユンガーがニヒリズムの克服を企図して採る途は、やはり形而上学のうちに留まることになるという、ハイデガーのユンガーへの批判を明らかにした。

第2章 ニーチェとユンガー - ニヒリズムと形而上学の超克を巡って

第1章の主題を受けて、ニヒリズムと形而上学の克服という主題を巡る議論を、1930年代のハイデガーが参照軸としたニーチェの思想と、前述のように同じくニーチェを受け継ぎながら「労働者」という人間存在の「形態」と「総動員」にニヒリズムを見るユンガーの思想を辿ることで考察し、この時期のハイデガーが「放下した平静さ」、存在の歴史、別なる始まりということと思惟していた事柄を究明した。

第3章 ニヒリズムの現在 - 総動員と技術の本質について

これまでも見られてきたように、ユンガーが1930年代当時の人間存在のあり方を「労働者」の「形態」として規定し、「総動員」という体制の中で、個人や社会のあり方が少なくとも第維持対戦前の、従来とは全く異なるものとなりつつあるといち早く指摘している点を、その著作から跡づけて、こうした思想が後期のハイデガーの技術論の中で展開される「総かり立て体制」と「象象」へと重要な契機を与えていたことを明らかにした。

第4章 ニヒリズムの風景 - ユンガーとハイデガーから見た一考察 -

本章では、テクノロジーの象徴のとして、現代の都市がどこに行っても一様な風景となってしまう理由と、我々にとっての「原風景」のあり方を、ユンガーとハイデガーの論述から読み取った。そして特に、ハイデガーが「地方に留まる」ということによって、伝統的な文化の継承と新たな創造のために、さらには本来的に我々が思惟することをなし得るためには、自らの風景への確たる帰属性と土着性が肝要ある、と思惟していることを示した。

この間の考究を通して明らかになるのは、ニヒリズムを楽観主義のもとに眺めるユンガーは、ニヒリズムの向かう先を必ずしも悲観してはいないということである。ニヒリズムの過程は、段階を経て、最終的に「新たな充足」へと至ると考えられているのである。もちろん、その最終段階に至るためには、前段階を的確に把握し、診断結果を明確化することが必要である。そのためにユンガーは、日常性における我々のあり方、とりわけ「労働者」の「形態」としてのあり方を、周到にニヒリズム的な事象として取り上げ、解釈し、その本質を明らかにしようとしたのであった。しかしこの点に関して、ハイデガーはユンガーに批判的な立場に立つ。ハイデガーに

よれば、ニヒリズムは完了に至っていわゆる「正常状態」となっても、けっして終末に至らず、我々はそのニヒリズムの幅広い領域を耐え抜かねばならないのである。ハイデガーのこの見方は、ユンガーの楽観主義に比して、きわめて悲観的であると言える。形而上学の思惟様式から脱することができないかぎり、我々はどこまでもニヒリズムのうちに留まらざるをえないのである。そうであればこそ、形而上学とは別なる思惟の始まりが、ハイデガーによって求められたのであった。

このようなハイデガーからの問いかけに対するユンガーの応答として、ハイデガーとの間で交わされた書簡から読み取れるのは、ユンガーが最終的にニヒリズム克服の途として希望を寄せているのは、詩作を含めた芸術であったということである。それゆえ、ユンガーとハイデガーの芸術作品をめぐる思惟の異同を明らかにすることが今後の課題となるだろう。

また、ニヒリズムが我々に対して問題化してくるのは、それが我々の思惟によっては的確に把握できない「無」に根ざしたものであるからである。ユンガーが「形而上学の言葉」を語っているとして批判されたのもそのゆえであった。つまり、そのような「無」との関わり方が、ニヒリズムをめぐる我々の思惟の躓きの石であったと考えられるのである。ハイデガーは形而上学的な思惟とは別なる思惟のあり方として「放下した平静さ(Gelassenheit)」という語を提示し、従来の西洋の思惟の中心にあった主観性、主体性にもとづく思惟を放棄することを試みていた。そうした事態のあり方を、我々の伝統は「自然(じねん)」という語で表してきた。ここに我々は、ニヒリズムの克服ではなく、ニヒリズムを耐え抜くことの一つの可能性を見出すことができるのではないかということが最後に示唆される。

なお、本研究の報告書の第1章は、日本現象学会第35回研究大会(2013年11月、名古屋大学)での、松本啓二郎氏をオーガナイザーとしたワークショップ「ユンガーとニヒリズムの今」での発表原稿に加筆修正したものである。第2章は、『ハイデガー読本』(法政大学出版会、2014年)に掲載された同名の論考を再録した。第3章、第4章は、それぞれ『愛媛大学法文学部論集人文学科編』第38号(2015年)、及び第40号において発表された同名の論考を再録したものである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

1. 山本與志隆「ニヒリズムの風景 - ユンガーとハイデガーから見た一考察 - 」(『愛媛大学法文学部論集人文学科編』第40号、pp.

33-53、2016年、査読無)

2. 山本與志隆「ニヒリズムの現在—総動員と技術の本質について」(『愛媛大学法文学部論集人文学科編』第38号、pp.69-87、2015年、査読無)

〔学会発表〕(計2件)

1. 山本與志隆「ニヒリズムの形態としての労働者 ハイデガーとユンガー」(京都ヘーゲル讀書会2014年度冬期研究例会、2015年1月11日、京都教育文化センター(京都府京都市))

2. 有馬善一、竹内綱史、山本與志隆、松本啓二郎「ユンガーとニヒリズムの今」(日本現象学会第35回研究大会ワークショップ、2013年11月10日、名古屋大学(愛知県名古屋市中))

〔図書〕(計1件)

1. 秋富克哉、古荘真敬、森一郎、安部浩(編) 他26名『ハイデガー読本』(法政大学出版局、2014年、406頁)、山本與志隆「ニーチエとユンガー」(pp.156-165)その他を分担執筆。

〔産業財産権〕

なし。

〔その他〕

なし。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山本 與志隆 (YAMAMOTO, Yoshitaka)
(愛媛大学・法文学部・教授)

研究者番号：50294781